
赤弓渡の伏平夏!

空駆南麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤弓渡の伏平夏！

【Zコード】

Z6202U

【作者名】

空駆南麻

【あらすじ】

中学一年の時、転校生と一緒に学級委員になつた私は事件に巻き込まれる。……すまない。軽くいじめられただけだ。しかもすぐに解決した。だが、それは私のまわりにとつて眠れる獅子をメガホンで罵り起こすような行為だったわけである。ああ、結果としておかげで私は恋に勉強に大忙しだよ。……本音はどちらかというでもよく面倒臭いんだがな……

この小説は基本的に以下の登場人物で構成されます。

すべてを面倒臭いで片づけられるだるがり主人公「赤木准」
不良モドキのお人よし優等生委員長野郎「夏目祐樹」
楽しければそれよし！今を全速力で走りたい「渡会凜」
おせつかい焼きの活発迅速少女「弓素明音」
いつもみんなの常識役、脇キャラに甘んじます「伏瀬将門」
猫飼い靈見え超身体能力の非凡生命体「平郷秋良」

ハルウララ

春(はる)らら、とでも言(い)うべきか。春(はる)の日(ひ)差(さ)しは柔(じゅう)らかく暖(ぬく)かい。冬(とう)の冷(ひや)気がまるで嘘(うそ)だつたかのよつなこの陽(よう)気が私はなによりも好きだ。」 こういう日(ひ)は日(ひ)当たりのいいところに寝(ね)転(ころ)んでいたいのだが……

「今日(きょう)からお前(まへ)たちみんな中学(ちゅうがく)一年(いん)生(せい)だ。後輩(ごばい)たちのいい見(み)本(もん)となるように春(はる)だからって氣(き)を抜(ぬ)かずに、しつかりと学校(がっこう)生活(せいかつ)を送(おと)るように」

すでに幾(いく)人(じん)かの陽(よう)気に負(の)けて同(どう)級(き)生(せい)は机(机)に突(つ)っ伏(ふ)している。すぐ後(うしろ)の席(せき)の幼(おさな)馴(な)染(せん)も静(しずか)だから恐(おそ)らくそうだろう。たとえ寝(ね)てなくとも、この初(はじ)老(ろう)の担任(たんにん)教師(きょうじ)の話を一体(いっぴん)何(なん)人がまじめに聞(き)いているのだろうか。

クラス替え(はい)のないこの学校(がっこう)では教室(じょうしつ)が変わ(かわ)っただけで3学期(学期)の初(はじ)めにした席(せき)替え(はい)もそのままだ。一体(いっぴん)何(なん)人が進(すす)み級(き)した実感(じつかん)を感じ(う)いるのだろうか。少(すくな)からず私はそんなものは感じ(う)いてない。春(はる)の到来(らいり)は実感(じつかん)しているのに不思(ふ)議(ぎ)なものだ。

「……お前(まへ)ら、ものの数(すう)分(ぶん)の話(はな)も聞(き)けんのか。まつたく、後(うしろ)輩(ばい)に尊(そん)敬(けい)されるような先(さき)輩(ばい)になりたいとは思(おも)わないのか」

担任(たんにん)は憂(ゆう)うようにため息(ためいき)をついている。ここで(ここで)の行(い)いがそれに直(す)結(すく)するとは思(おも)えないが。まあ流(りゆう)石(いし)に校(こう)長(ちょう)の話(はな)のあとでよくそんなに寝(ね)ていられるな、とは思(おも)えてきた。あれの間(ま)寝(ね)ていたから今は全く眠(ねむ)くない。できることなら今(いま)だつて寝(ね)ていたい。睡魔(すいま)が夢(ゆめ)への橋(はし)渡(わた)しを行(おこ)つてくれるのなら片(かた)道(みち)切(き)符(ふ)だらうと行(おこ)つてやる。

「……実は転(てん)校(こう)生(せい)をこのクラスで受け持(うけ)つことになつてているのだが……」

見(み)回(まわ)しながらの担任(たんにん)の言葉(ごんばい)にざわつく教室(じょうしつ)。

「ま、いいだろ? 呼(あ)んでくるから静(しずか)に待(まつ)ていろ」

といわれたが教師(きょうじ)が出(だ)るや否(う)やすぐに教室(じょうしつ)は騒(さわ)ぐとなる。寝(ね)ていだつて者(もの)もたたき起(おこ)されていいる。

「どんなヤツだろいねえ、転校生」

いつの間にやらすぐ後ろの席の凜も田を覚ましている。

「面白いやつならいいんだけどねえ。そこらどう思うよ赤城」

「お前みたいのじゃなればいい。これ以上騒がしいのは御免だ」

「マックタマター。友達すべくねークセにい」

「それとこれは関係ない」

私も同じ穴のムジナだから言わんでおぐが、だいいちお前も他人とウマが合わんから友達少ないだろうがと。

「んにしてもさー、こんなときでもドン暗い顔してられんのは相当のネクラちゃんですよ赤城い」

「ならばなにか。『これでまた友達増えるぞひやつほう！』 という顔だな、凜くん』と半ばにやけながら言つた方がいいか」

「いやそこまで言えたあ思つてないよ。ただもうチョイ明るくなろーぜつてことや。ていうかなんでそんなライライダーハンミみたいな言い方なのさ」

「知るか。誰だそいつは」

「リトバス」

またよく分からん漫画のネタを……いやアニメか？ まあどうでもいい。

「よし、賭けだ。転校生が男に百万両…」
嬉々として財布を出してくる。

「女子に十円」

「おーおい、賭けにならんぜ、もつと賭けろよ」

「言つておくが私は百万世帯を一年間養えるほどの金はない」

「いや百万両つて百円つて意味だから」

「わかつている。」
「隠居さんがよく使つてる」

「駄菓子屋さんのとこの？ いやー、あの人も長生きだよねえ。私たちが生まれる前からジジイやつてるし」

「先の大戦も生き延びてる人だ。運がいいのだろう」

「そういえば絶対徵兵くらつてる歳だよね、つと？」

廊下をのぞいていた男子があわてて席に戻ってきた。教師が戻ってきたのだろう。急に教室が静まり返る。

「黒板に自分の名前書いた方がいいですか？」

うなずく教師に黒板に向かう転校生。大きく黒板の中央に縦に書いていく。……結構きれいな字だな。名前を書き終えた転校生がこちらに向き直る。

「茨城の方から転校してきました夏目祐樹です。よろしくお願ひします」

至つて模範的だ。それに少しばかり整った顔をしているみたいだ。身長は、目測で165ぐらいか。……なんか男漁りしてるみたいでいやだな。

「夏田は保護者の都合で引っ越してきた。クラスに溶け込むように仲良くするように」。では、夏田の席は窓際の最後尾だ」それを聞くと転校生は同級生の注目（私含む）を受けながら移動し席に着いた。

「なんかもつと問題児みたいなのが来ないかねー」

……そんなことをつまらなさそうに言った、すぐ後ろの席の幼馴染みと仲良くするのもなんかいやだ。私は平穀無事に暮らしていきたい。

「別にどんな奴でもいいだろ？」

「いやや、赤城。私にとっちゃ、これはもう死活問題クラスだよ。退屈そうだよ、あんなのと仲良くしても」

「転校生だからって仲良くしなくてはいけない道理なんてない」「でもそれはひどいっしょ」

「私語やめ！ まったく、ことある「」ことに蝶のふじやない」

「ではこれから委員会を決めたいと思つ」

黒板に委員会の名前が書かれていく。……どれもこれも面倒臭そ

うだ。

「まずははじめに学級委員。女子一、男子一だ。誰かやりたい奴はいるか」

学級委員は早い話、クラスの雑用みたいなものだ。……やりたくない。

「……別に推薦してもいいぞ」

しばらく待つたが誰も手をあげなかつたらしい。痺れを切らした担任がそういつた。……なんだろう、イヤな予感がする。

「……なんだ、渡会？ お前が立候補するのか」

なるほど、凛が手を挙げたのか。……ますますイヤな予感がしてきた。「イツは私を面倒臭い事態に置きたがるからな。小学高学年時に飼育係といつこの世で最も面倒臭いものに私を巻き込んでくれたからな。

「いや、違いますって。わたしがそんなことするガラージャないってことはわかってるつしょ。推薦ですよ、すーいーセーん」

「ああ、わかつた。誰を推薦するんだ」

「赤城さんです」

やつぱりかつ。やつぱりそななるのか。

「ついでに理由を聞いていいか」

「親友として赤城さんのことはよく知つてるので。まあ、一年間無難にこなしてくれると思いまして」

しかも理由は普通（と言えるのか知つたこつちやないが）、他に立候補者がいない限り他薦でも学級委員に強制的に決定だ。誰か女子で立候補しろ。もしくは推薦しろ！

「してやつたり」

凛がつぶやくのが耳に入る。

「待て！ お前、なぜ推薦したつ！」

私は後ろを向いて小声で怒鳴るといつ試してみると案外現実でもできる技能を使った。

「いやま、面白やうじやん

「どこかだ。私はすごぶるつまらないぞ、このいじめっ子気質」「えー、面白いじゃん。推薦されたらやる気なくてもさせられるつてのは」

「……お前と付き合ってるところがない」

「赤城に強制勉強を執行されるテスト前後は、私にとつちや地獄だよ。だから、その仕返し」

人が一応善意でやつてることに対してもそれか！……確かに幼き日の意趣返しも半分入っているが。

「ほらほら、赤城。男子に推薦一人来たよ」

「……」

無言で凛の指差す方向を見る。

「理由？ いや、あれですよ。なんつーか、そう！ 親友ですからー、じいづなら頑張つてくれるんじやーないかとー。なあ平郷！」

推薦者は富島でされたのは平郷か。軽率でなんかしゃべり方からして頭の悪そうなやつだ。二人ともできるだけ関わりたくない。クラス替えがなかつたことを恨むな。

「災難だねえ、平郷も。いじめられつ子も大変だ。静かに暮らしたいだろうに。ま、しゃーないけど」

「お前にだけは言われたくない。あとお前にもそのくらいの災厄は来てもいいと思う」

平郷は一年の頭からいじめられてるという話だ。

「……」

しかし、ああも根暗だと目を付けられるだろう。結局は本人の性格がもたらした結果だ。何度か放課後の教室で殴られるのを目にしてるが、反撃したり悪態をつくのは見たことはない。格好のいじめの的だろう。表情も仏頂面でほとんど変わらない。長くなりすぎた前髪から時折覗く眼は常に危なげな光を帶びている。さらに表情と声に乗っている感情が違うことが多々あるからかどこか不気味がられてる節がある。さらに平郷をいじめているのは集団。だから誰も助けようとせずに傍観しているのだろう。かくいう私もそうだ。

昔はあれでモいじめる側の奴だつたが……小学低学年の頃の話だ、力関係などいくらでも変わるだろつ。おまけに私は当時被害にあつたクチだからな。今だつてあまりかかわり合いたくない。そこまでひどい目に合わされたわけではないがここまで引っ張つてきてしまつた苦手意識を早々変えられるものでもない。

「では確認するが、ほかに推薦や立候補はいらないな。いたら今のうちに手を挙げるよう」

つと、他に立候補者がいるように祈るのを忘れてた。……もういい。面倒臭いからさつさと終われ。もう一年でもやってやる……。

そうして、私があきらめた時だつた。

「……夏田。お前、手を挙げているが推薦でもするのか？」

転校生が？ 窓際の最後尾を向くとほとんどの生徒がそこを見ていることに気付く。

「先生。俺は転校したばかりで名簿は見せてもらいましたけど数人の名前しか把握してない、というより誰も知らないんですけど」

「……立候補するのか？ 転校初日に？」

担任の声色は正に「信じられない」とでも言いたげだつた。

「学校に慣れるのはそれが手つ取り早いと思ったので」

「稀有な奴だ。本当にいいのか？」

「先生がいいならですけど」

「いや、こつちとしても推薦でいやいやつてる生徒を使うよりは、自薦でやりたがっている生徒の方がいい。では、ほかに立候補や推

薦は

「途端に数人の女子から手が上がる。恐るべし、転校生パワー。……まあ、これで私が学級委員をやらなくて済むならそれでいい。

しかし、そうは問屋が卸してくれなかつた。結局私が学級委員をすることになつた。

経緯を説明するところなる。

なぜか全員推薦だつたのだ。ここでも宮島と平郷みたいな力関係

が働いていたようだつた。女子のソレはもつと陰湿なものらしいがそんなの知らん。私はそちらへん無縁だからわからん。ついでに言うと凛も無縁なクチだ。

推薦多数という事でクラス投票が始まり、結果として私が当選したという事だ。ちなみにクラス投票にあたつて立候補者（とはいうものの実際にはやりたくない連中である）が演説といつ名の自己アピールすることになつてゐるのだが……他の女子は多少乗り気ではなかつたものの自分が学級委員をしたい旨を言つていてもかかわらず、私は「投票したければしり」としか言つていない（もちろん担任に軽く怒られた）。にもかかわらず、なぜ当選したのか。はなはだ疑問だ。しかも投票用紙に名前とともにに書かれていた理由は「[]の中で一番しつかりしてそつだから」らしい。……おかしいだろ。[]のクラス、一年のところからうすうす思つてはいたが……おかしいだろ。こんな面倒臭いのが嫌いで、マジメなふりをする気もない奴のどこがそうなんだか。

余談だが学級委員は修学旅行期でもないと本当にクラスの雑用でしかないので、ほかの委員会と兼任が可能なのだが……あの転校生、夏田は図書委員にも立候補した。図書委員は性別問わず一名。またも推薦合戦となつたが、平郷が立候補したことで終わつた。思うのだが、そんなにお近づきになりたいなら立候補しろと思うのだが。やはり自分がやるのは嫌なだけか。

さて、やつとこやH.R.がおわり、明日からは平常授業。……学級委員とか本当に面倒臭いな。転校生だけに押し付けるか？ そんなことを思つていた時だつた。

「あー、いいかな？」

「あ？」

振り向くと転校生だつた。……今のは初対面の相手に對しては流石に無愛想すぎたか。

「夏田祐樹。さつと自己紹介したけど、一応。よろしくな

「……」

……若干、罪悪感が襲う。なんというか、人当たりのよさそつな奴だ。

「赤城さん、だよな」

「ああ。赤城准。……一応、よろしく」

「その幼馴染の渡会凜だー……って、どうした?」

凜が名乗った途端、なんかすごく嫌なものを思い出したような顔をした気が……。

「あ、いや。なんでもない。よろしく」

と言うその後ろには平郷。珍しく髪を左右に分けて眼鏡をかけている。そんなものつけてたかと一瞬思つたが、普段前髪で隠れて見えにくいし長い髪を放置してたら目に入つて視力も悪くなるだろうと思い放置。普段見て見ぬふりをしているのにここだけ話しかけるのもなんだからな。

「…………夏目行くよ」

「ツヒ、じゃ、俺はこれから図書委員だから」

そういうて、後ろに控えていた平郷と一緒に教室を出て行つた。

「……平郷と知り合いだつたのかね」

なにを思つたやら凜がそんなことを言い出した。

「……何故そう思つた」

「いや、ほほ他人同然の人にすぐ背後にほほ無言で立たれるつていやじやん。なのに、そんな平郷に怪訝な顔一つしないなんてさ。だから、そう思つたけど……いや、いいヤツなだけかもしんないけど」

「そりなんだろ。帰るぞ」

ちなみに夏田は図書委員会でも一年生副委員長になつたらしく、三日後には一部から「委員長」のあだ名で呼ばれるようになり、本人も嫌がつてゐる風ではないのでそれはすぐ広まつた。あだ名なぞ面倒臭いものでしかないとつてゐる私は呼んでいないが。そんなこんなで一週間もすればすっかりクラスになじんでしまい。

おかげで面倒なことをやつこなすんだ。

ハルウララ といつわけでもない

四月末平日火曜。今日も晴天だ。雲一つない日本晴れの青空が早すぎるサザエさん症候群にかかつた私の心を晴らして……くれればこの面倒臭がりな性分もさつさと解消されるだろに。残念ながらこんな日は何やら青空にあざ笑われてるような気がしてならない。もつとも曇つていても雨降りだろとあざ笑われてるような気がするが、晴れの日はなんというか「雨でも降つてれば憂鬱もごまかせるだろが残念ながら曇つてすらないよつ!」と言わてる気がする。ずいぶんと意地の悪い青空だ。一番ダメなのはそんなこと感じてる私に他ならないのだが。晴天青空が私の憂鬱な心境とものの見事に反比例してくれていつそムカついてくる。

とまあ、こんな無駄なことを考えてる暇も余裕もない。遅刻寸前の時間帯で家を出たので考えながら歩いてスピードが落ちると遅刻しかねない。遅刻が続くと内申に響くからなあ。四月だけでもう5回も遅刻している。そろそろまた反省文の一つでも書かされるのではないか? それは面倒臭いな、じゃあ少し走るか。……ナマケモノ並の体力だからやめておこう。と思った矢先に手を引っ張られ強制的に走らされる。

「アンタなにちんたら歩いてんのよおつ!」

私の手を引っ張りながら走つてるのは遅刻仲間の『素』だった。こつちを向いてほぼ怒鳴り声で言つてくる。そんな怒るとしわができるぞ。

「走ると疲れるだろ?」

「もう走らないと遅刻確定だから! ガツコ着くまで手え離さないからねえつ!」

無駄に怒鳴つてゐからか息切れしてきている。一言しか言つてない私が走り始めて百メートルほどだといつのに息切れしてるのはおそらく鍛え方と栄養の取り方の違いだと思つておこう。向こうのほ

うがいい意味で肉付きがいいしな。揺らすのはそのポニー・ルだけにしてほしい。中学生にしてはお前は発育いいほつだと自覚しているのか？

「なんか失礼なこと言わなかつた？」

「いやあつ、疲労によるつ、幻聴、だろつ。少つ、し歩いたりどつだつあ？」

「すでに疲労困憊なアンタに言われたくないわ……」

そういうえばその気になればナマケモノは走れるし泳げるらしい。微動だにせず木にただぶら下がっているのは天敵から隠れつつエネルギー消費を最低限に抑えているためらしい。ただそのぶら下がつているのだつて相当体力がいるだろう、つまり私の体力はナマケモノ以下というわけだ。というか私は野生動物だつたら体質的に淘汰されていそうだ。ああ厳しいかな野生の世界。とりあえずもう足を動かしたくない。

「ちょ、あんたスピード落ちてるからつ！ ほぼあたしが引きずちやつてるからちゃんと走りなさいよー！」

「ムリつ、だ。疲れた……」

「アンタは体力なさすぎんのよー つたへもひ、ちょっとだけ歩くからね」

ああ、ようやく一息つける……。深呼吸深呼吸……

「なんでそんな壊滅的に体力ないのよ……」

「運動不足、つだ……」

「いやそこいら辺の運動音痴ももつちよに体力あるから。ほら、歩くなさいよ

あー、普通にやばい。なんぞ朝に食べたものとか吐き出しそうだ。

「すまん……背中わすつて……」

「あー、もつしょづがないわねえ……」

こんなやり取りを悠長にやつていたので弓素の奮闘むなしく遅刻した。すまない弓素。今度遅刻まで予断を許さない状態だつたら置

いて行つてくれ。……だが体調不良の私を看護していたという名目で弓素は遅刻を不問に付されたのに対し、私はしつかり放課後生徒指導室への筆記用具持参の上で招待されたのが納得いかない。確かに私の運動不足は自助努力が足りないといわれても仕方ないが、そこは遅刻しないよう全力疾走したといふところを勘案し……た上で生徒指導室なんだろうなやはり……。嗚呼、絶対学級委員であるところをチクチクつづいて説教された後に反省文書かされるんだろうなあ……。

休み時間、放課後の生徒指導室の件を話すと凜は

「なら遅刻スンナヤー」

まったくもつてその通りだ。

「んで、気分どう？ 治つた？」

「まだ少しな……。胃には何も入つてないはずなのに吐き気がする火曜日は体育がないのが救いだ。

「限日は数学だったよな？」

「そうそ、スーガク。めんどくさいねえ

「…………君の場合なんでもめんどくさいと思うよ」

いつの間に沸いて出たやら平郷がそこにいた。今日は前髪で目が隠れている。

「平郷はどの授業でも前髪でノートをそれそうにないだけだ」

「板書はとつてるよ。それ以外は知らない」

「なんだどう！ その前髪でノートをとれるなんて……念写能力の持ち主！？」

そんな馬鹿な。ていうか透視じゃないのか。

「そう。僕は念写能力を持つていて」

「なにい！ ま、まさか冗談で言つたことが事実だとわつ……」

で、いかにして念写すんのー。おせーーー

「知りたいのかい？ 難しいよ？」

「念写能力の獲得？ 否！ 断じて否！ ノートをとるという煩わ

しさからの解放！！

「確かに煩わしさからは解放されたいがな……」「
しょせん嘘だらうしな。

「では秘伝の術、『』教授しよつ」

「いえーい！ やつたー！ 愛してるーー！」
だが一人ともノリノリだ……。

「ではまずノートに授業内容に則したことを見書き綴ります」

「ほうほう」

おい、ノートをとる煩わしさからの解放がいきなり崩れてないか。
次にノートにつづった内容を一言一句逃さずに記憶

「きゅんきゅん、きゅんきゅん。ただいま頭のハードディスクに記
憶中であります」

太陽拳みたいなポーズをしながらそんなことを言つている凛の姿
は滑稽だ。

「そして黒板に早急に視線を移す！ カメラのシャッターを切るよ
うに瞬き数回ーー！」

「デイラッシャーー！」

雄叫びがうるさい。

「するとーー！」

「するとおーー？」

「ノートに書いた内容が……黒板に『』されていぬ」

「何……だと……？ ま、まさか板書をノートに『』するのではなくノ
ートに書いた内容を板書にするための念『』ーー？」

「そうぢ……」

「で、でわ、今までの授業の板書はすべて平郷が黒板に念『』したも
のだったのかつー！ なんてこつた。こいつあ大事件だよ。これで煩
わしさからの解放！」

「ノートは自分で書く必要があるだろ」

「そんなことは些細な事さ、関係ねーー！ 考えても見てよ、自分の
ノートが板書になる。これでいちいち黒板を見る煩わしさからの解
放！」

放！」

「それ言いたいだけだな……」

「あ、バレてる？」

「あと悪ノリをやめろ」

「そういうと一人してため息をついて

「念印なんてできないよ。前髪搔き分けてノートとるだけ……」

「いやまあ、だよねえ」

一瞬で素に戻った。それにしても平郷のテンションの差が激しい。

「おい平郷！ つきから本当にしつせーんだよ！」

そして平郷が素に戻ったとたんに因縁つけられるのはいつものこと。因縁をつけてきた富島を一警すると舌打ちひとつしつしつと向かつていつた。

「うおう、放課後痛めつけられるフラグだねえ。……ちと悪いことしちまつたかも」

「なら放課後止めに行つたらどうだ」

「ヤダよ、なんかされるかもしね」

そんなことを言つてゐるが、一時間目の開始を告げるチャイムが

鳴り会話は打ち切り。数学の教科書をカバンからだす。

「平郷が痛めつけられるつてなんとなく想像できないねえ……」

凛のつぶやきが何となく耳に入つたが事実としてあいつはそういう目に合つてゐるのだ。そして私はそれを知りながら放置している……。正義感などないに等しいが妙な罪悪感がある。……私には関係ない。あいつがどんな目に遭おうとな。

ハルウララ でも屋内

HRが終わりクラスがクラスメイトの声でにぎわう。いつもなら私もうるさいクラスメイトの間を縫つてとつとと帰路に就くところだ。

が、今日はそういうわけにはいかない。生徒指導室へのご招待が待っている。はつきり言って何よりも面倒臭い。意味もなく這いづくりのた打ち回った方が、まだ楽しそうだ。

帰ろうか。帰つてしまおうか。帰らずに図書室で居眠りでもしてようか。……明日には倍以上の説教が待つていてこと請け合いだ、やめておこう。

「お勤めいってらー」

はちきれんばかりの笑顔の凛がそんなことをぬかす。なんだ、他の人の不幸は蜜の味とでも言いたいのか。一発殴つておこうか、受け止められてカウンターもらうのが関の山だろ？

「……さつさと行つたら？」

同じく笑顔、そして抑揚のない声でそんなことを言つ平郷に軽く殺意を憶えながら鞄をひとつかんでクラスを飛び出す。正直こいつは殴られていい存在だと思つ。

一階、職員室のすぐ脇。生徒指導室。まあ反省文は今までと同じ内容書くとして……説教が長くなかったらすぐに帰れそうだ。反省のかけらもない、単なる今までの焼き増しに過ぎない文字の羅列を反省文

と認められればの話だが。

まあ、何はともあれ入らなきやはじまらないと生徒指導室の戸を開ける。

「失礼します」

「あ、赤城さん。さつさと入つて」

……脈絡なしに夏目がいた。

「どうして夏目なんだ。生徒指導の筋肉達磨はどこにいった」

「筋肉ダルマって……確かにその通りだけどさ。早川は奥さんの陣痛が始まつたつて病院へ」

私以外いなとはいえ教師を呼び捨てにしてるお前はあだ名を非難する資格がないように思つ。そんな資格、心底どうでもいいが。

「今日は職員会議の日みたいでほかの先生も手が空いてなくて、それで同じクラス委員の俺が白羽の矢が立つたわけ」

「お前相当な暇人だな……。こんなことに付き合おうなんて本当の暇人だ。並の暇人はこんなことしないからな」

別名はお人よしか。断つても別の教師に白羽の矢が立つだけだろうに。

「そう思うなら反省文書いてよ。さつさと帰りたいとは思つてるんだから。暇じやないよ、一応」

「よし、ならば今から一人で帰ろつ。お前がここにいなかつた、私は誰もいない指導室でいくら待とうと来ない筋肉ダルマが指導の件を忘れたと思い込んで帰つたという設定で」

「……確実に俺も説教くらうよね、それ」

「当たり前だ。どうせ私は明日説教くらうだろつからな」

「今回は忙しいから説教はなしつついつてたよ。サボつたらさすがにあるだろうけどさ」

「説教なしだと？ それをはやくいえ、俄然やる氣が出てきた」

あのやる気を大いに削ぐ説教がないなら喜んで反省してるっぽい文を書いてやろつ。反省文は『反省してるよう見えて全く反省してない文』の略だということをこの手で見せつけてやる。

「はい原稿用紙。五枚目の半分までは書けつてさ」

くく、たつた三枚の原稿用紙では私を止めることはできん。今なら六枚でも八枚でも書いてやろつではつんあー？

「待て……五枚か？ 五枚なのか！？」

「そりだけど」

聞き間違えじゃない。数えればちゃんと200字詰めの原稿用紙が5枚ある。馬鹿な、去年は三枚だったのに進級したからと言つて一枚も増やすか！？

「五枚とこうとあれば、400文字も余計に書かなければならぬじゃないか」

「そうだね」

「なんとこうとだ……」みんなはずじやなかつたのに、なぜ？」

「赤城さんは常習犯つて言つてたから、それもあるんじやないかな」

「そこをつかれると否定が全くできん……」

「ほりショック受けてないで書こうよ、早く書き始めないと本当に

日が暮れる」

「手伝え、いや手伝つてくれ、ぐださー！」

「ムリ。書いたことないから」

「ええい、つべこべ言わずに手伝え」

「黙つて書きなよ」

自分からとはいえ巻き込まれたみたいなやつに求めるのは酷か。そもそも無茶な要求だからしょつがないか。

さて、占めて1000文字。遅刻の反省文でどうやつたらこれだけ書けるというのか。……それは600文字の時点で言えるか。よくよく考えたらよくそんなにかけたな。

「とりあえず書けるところまで書こうよ。こつまでたつても終わらぬいじやないか」

「ああ。書くことが無くなつた時のことは考えずに書くよ。果て無く面倒臭いけどな」

とはいつものひづこもならなこのは田に見えてくる。本当に書けるのか？

カリカリとペンが紙を擦る音と紙をめくる音だけが部屋を支配する。一方は三枚目に突入した原稿用紙に悪戦苦闘し、一方は無表情

に小難しそうな本を読んでいる。

二人の間に壁はない。だがその間には確かに壁がある。

一方は苦渋と苦悩に苛み、一方は何も考えずに安息の時を過ごしている。両者の差は何か。いつたいどんな違いがあるというのだ、いつたいどんな……

「などと意味不明な供述を繰り返しており……」

「捜査は昏迷を極めている模様です。……行き詰った？」

心配そうに用紙を覗いてくる。

「いや。うまいこと水増ししながら進めている」

少なからず血迷つて変なこと考えるだけの余裕はある。行き詰る可能性は大いにあるが。

「ん、それはよかつた」

まあちらちら時計をみているあたり夏目も何も考えてないわけじゃないんだろう。本当は暇じゃないとは言つていたしな。

「書けそつかな」

「さあ、どうだらうな。まだ結構時間がかかると思つていた方がいいぞ。あと一と半分だが」

3枚目が終わり4枚目に入る。さあ、どうこう方向に水増ししてくれようか。

「まだかかるか。……俺はそんなに早く書けないから文句は言えないけどさ」

「そういえばお前暇じやないとか言つてなかつたか」

「まあね。とはいっても特売だけね。商店街の第三・第五火曜日の」

……第五も特売なのか？ 私は買い物しないからわからん。

「米買わなくちゃ、米。一番の食客がいなくとも減るの早いんだよ

「家事とかもお前がやつてるのか？」

「付け焼刃だけどね。ほら手が止まつてるよ」

そう言つと再び読書に戻つていく。私も急いで内容の水増しを続ける。早く帰りたい、その一心で文字を連ねる。……本当にいつ終

わるかわからんからな。夏田には悪いことをする。

あ、でも何となく楽しい。適当に文章水増しするのは結構楽しい。
まあ面倒臭いけど楽しい。……ああ、楽しいけど至極面倒臭い……
楽しいだけで止めておけばよかつた。

でもここまでどうにかなつてるのが奇跡みたいなものか。どうに
もならないと思つていたし、大きな詰りも今のところなし。絶好調
ではないか私は。あ、こつこつのは天狗になつたとたんに行き詰る
のがお約束だがそんなことはないように頼む。

「あと1と1／4だ」

「報告いいから早く書いてよ」

夏田の笑いを噛み殺したような声を聽きながら、次の水増し文を
考えながら、行き詰ることが無いことを祈りながらペンを進め、つて
「ちょ、字間違えた。修正液よこせ」
「ないのにボールペンで書いてたんだ。ちょっと恐ろしいな
……妙にカツコつけながら書くものじゃないなあ……

ハルウララ でも屋外はこんな

何もしていないときは退屈。なにかを待つてるとときはもつと退屈。人を待つていると一番退屈。それはこれから楽しいことをするわけじゃないし、今アイツが楽しいことをしてるわけじゃないのは知っているから。もしかしたらアイツは内心楽しんでいるのかもしれないけれど、それはただのちっぽけな優越感だつて知ってる。

アイツは、平郷は「自分を必要としてるなら飽きるまで相手をしてあげる」。そう言つてた。それは自分が飽きるまでなの? それとも相手が?

あなたにとつてイジメは本当に暇つぶしなの? ただ力に屈して現実から逃げているだけじゃないの? たとえそうじやないとしてもあなたの考え方じや同じ」と、ただの報復におびえるいじめられつ。

『自分は強い。』

『本当なら楽勝だ。』

『でも必要以上に傷つけたくない。』

違う、ただ怖いだけ。相手が怖いだけ。わたしにはそうとしか見えない。できるならやつてほしい。ああいう手合いには少しやりすぎるくらいがちょうどいい。

だけど、この考えを言つたらきっとこうかえられる。

『優越感だけで物事に口を挟んでくれないでほしいね』

『僕がどんなことをしていようと君には関係ないんだから』

これを言われたら時には平郷は聞く耳を持つてないから黙るしかない。

でも決してわたしは優越感でモノを言つてはいるわけじゃない。ただ平郷が心配なだけ。これ以上不必要に傷ついてほしくないだけ。

平郷がそんなことをされていると思うだけでなにも喉を通らなくなる。夜が白んでも眠れなくなる。その顔を見ても素直に笑えなくな

なる。

でも言つても聞かないからも、田の前でバカやつてやる。

やう今すぐに、いま昇降口から出てきやがつたその他大勢にとつてどりでもいにアンチクショウに向けて、恨みつらみ想い乙女その他全部ぶつけやんぞ！ 突撃、飛び込めー！ くらえ、わたしのマシンガントーウ！

「ここまで待たせんやー。テメーがいないとわたしや帰れないんだからや。まつたくいつたいなにしてんのや。この凛ちゃんが本気で待ちくたびれてんのよ、もうくたびれもつけだよ。いや勝手に待つてたんだけどさあ。でもまーひとまず喜びなよ、自分で言うのもなんだけどこんな口り美少女が待つてたんだよ、ほらもつと喜びなよー。どーせわたしが待つてゐるのを期待してんだる、このこのお。本気で待つてたんだからなー。わたしは平郷が校門来るのをずっと待つてたんだからなー。トイレにも行つてないんだぞー、尿意が湧かなかつたから、つてだつたら当然か。でも湧いてもいかないよ、すぐれ違いになつたら困る！ 誰が困るつて主にわたしが困る！ お前が困んなくともわたしが困る！ ……だから平郷！ おみやーとわたしがかんけー無いわけねえのよ、このバーカ！ オラ、とつとと帰るぜ、ドサクサまぎれに手でも繋ぎやがつたらお仕置きしてやんぞ、ほら手だせ、手をー。お仕置き恐れず繋いできたら困るからわたくしから繋いでやろう、光栄に思うがいいさー。いつも心の準備ができるないから繋げない、次はいつできるかわからない超がつくレアなイベントだぞ、どーだうれしいだろ？、さあうれしいと言え、さあ楽しいと言え、さあ可愛いと言え、どんなこと言われてもわたしは動じないぞ。今日のわたしはタナトスすら凌駕する存在だ、どうだす？こだらうー！」

「…………

「うう、なんか言えよ、沈黙で返さんでよ。わたしがバカみたいじ
やん」「

「……もうちょっと静かにゆっくりお願ひ。あと君は生粹のバカ」「よっし、りょーかい！ ってバカってどーいうことだあーーー！」

「わざわざ待つてゐから言つてんの……」「んだと、おひーー。」

「わざわざ待つてゐるから言つてんの……」

さみだれ 鍋に塩塊

5月9日。曇つた空から氣まぐれに太陽が顔を出し光を射していく。ただこれからひと雨降るの?でもいつのまにか、雲はだんだんと厚くなり陽の光を通さなくなつていった。

私はなんとなくその空を家庭科室前の廊下から見て『今日の降水確率はいつたい何%だつたか?』と考えたが今日も『素に引つ張られながら遅刻ギリギリで駆け込んだことを思い出し『まず天氣予報自体見ていない』と結論に達した。ついでに『ああ、そういうえば出掛けに母に呼び止められた気がしたがあれば氣のせいではなかつたんだな』とまあ気づいたところでどうにもならないことにも気が付いた。もし降つてきたら傘持つてきてないから帰りはどうしようか。凛は部活動は真面目にやらなければいけないのに何やら居残つて『素に入れてもらひうしかないか。

私もいい加減部活に顔を出さなきやならんだろうな。真面目にやらなきや内申に響くだらうし……遅刻を平然とするような奴が内申を気にするとか一種のお笑いだな。気にしなくちゃならんのだが気にしてるような行動を一切取つていないので問題か。まあ私の性分は急け者だからな、当分改善はなさそうだ。

とそんな取り留めがあるんだかわからないことを考えているうちに休み時間終了を告げるチャイムが鳴つた。私は曇つた空を一瞥すると家庭科室に入つていった。

「……とつとと始めさせろよう」

背中から凛のぼやきが聞こえる。家庭科の霧島がすでに授業時間の半分を説明に使つてるのでわからぬもない。

今日の家庭科は席順で分けられた4人班での調理実習。実習台には私の朝の時間を奪つた憎き三角巾とエプロン。これを用意する必要がなければ今日は走らなくてよかつた。

私にとつては調理実習はただ面倒臭いとしか思えない。食育の重要性といつのは理屈では理解しているがわざわざしなくてもいいような気がする。まあ簡単なインスタントやレトルト食品の充実してゐる今日日、じつでもしないと料理の仕方もわからずに入り立ちする、なんてこともありそうで怖い。私なんてその典型なんだろうな。

「さつさと始まらんかい」

……そんなことは置いといて後ろがつるむせこ。ていつか鬱陶しい。イライラする。

「つるむせこ。黙れ」

「わたしゃ腹減つたんだよ」

「そりが、なら黙れ。より腹が空くぞ」

む、と凛は口を噤む。むむむむ、と唸る。鬱陶しい。こんな些細なことにイライラするとは私も腹が減つてゐのかもしれん。

「静かにしる」

「るつさい、ガリ」

「黙れマメ」

ついには互いの身体的特徴で罵り合い。

「では、みなさん怪我の内容にお願いしますね~」

そしてタイミングよく霧島からのGのサインが出る。よひやつとこのイライラから解放される……。

「さあ立て、さあ着れ、さあ被れ。とつとはじめてとつと食つわ。

オラ早くしろー」

くすぶつてた凛に促され私も準備を始める。七面倒臭い限りだ。

今回の課題はナポリタン。パスタ茹でて野菜とソーセージを炒めるだけ。正に調理実習っぽいお手軽感。わざわざこれだけを作るために実習やるか? と思えるほどに。

さあまず具を切れと言つ話。真つ先に私に包丁が回つてくる。この班唯一の男子伏瀬は鍋だのを棚から引っ張り出してくるからいいとして

「おい凜、手伝え」

「アイハラーラー」

「え？ あ、はい」

凜に呼ばれて相原が包丁を持つ。……おい待て。

「お前がやれ」

「料理は専門外だかんね。私ははじめっから作る気ねーよー。」

「胸を張って言うな。料理は専門外だとか言つならせめて野菜を洗え、野菜を。それぐらいできるだろ」

「洗剤使つていい？」

「……絶対使うな」

果たして食べる気があるのかさえ疑わしくなる発言だな。最近は野菜用の洗剤もあるのは知っているがそんなもの学校にあるとは思えない。

まあいい。凜が野菜を洗つてるうちにソーセージでも切つておくか。が、今度は相原がまな板上のソーセージを前に包丁を持ったまま固まっている。

「おい」

「え？ え、ええ、あ、はい、大丈夫です」

少しあわてた顔で返してくる。まだ何も言つてないぞ。

「だつたら早く切れ。まさか切り方わからないとかいう箱入り娘じやないだろう」

「い、いえ。そういうわけじゃなくて。ちょっと刃物が怖いだけですから大丈夫です。……多分」

……同じことだつた。どの道箱入り娘みたいな……こいつ今までの調理実習どうしてたんだ。

「今までは明音ちゃんが手伝つてくれてましたけど、いつまでも頼つてられないですから大丈夫です！」

それは果たして大丈夫なのか。弓素のいる班に首を動かすと本人が心配そうに相原をちらちら見てる。なんぞものすごくダメな気がしてきた。

「大丈夫です。ちょっと、ちょっとだけ指きつちゃつたりしない
かつて怖いだけですから大丈夫です」

相原の謎の力説で余計それが加速した氣がする。が、時間もない
し本人がやる氣ならやらせるしかない。

「わかつたからとつとと切つてくれ。肉は任せた」

凛が速攻で洗つてきたピーマンを掴みソーセージの方は全面的に
相原に投げておく。もう本人ができるつていうならやらせとく。
そしてやつと調理器具と調味料を全部まとめて持つて伏瀬が戻つ
てくる。横着な運び方だ。フライパンが鍋に入らなかつたのか取つ
手の方が突つ込まれてる。

「そんなどんざいな扱いでよく怒られないな」

「うん。オレもちょっと驚いてる」

「コンロの上に鍋とフライパンを置き、鍋の中から調味料やら食器
を出してくる。

「ほら計量カップ」

「お、ありがと」

さてこれから伏瀬が鍋に湯を沸かしパスタを茹でる間に、私は具
を切り終えフライパンでそれらとトマトソースを炒めなければなら
ない。そのためにはもう少し急いだ方がいいか。……包丁持つ手震
わせながらソーセージ切つてる相原を手伝いながら

「あ、なあ相原。それ大きく切りすぎじゃね」

「え、あ、そうですか！？」

「いや別にそれでいいってんなら……。てか、ちょっとテンパリす
ぎ」

……でもちょっと前途多難の氣がするな。いやかなりか。とりあ
えず今回はいいとして、またこの面子で調理実習やることになつた
ら、絶対に相原に包丁は握らせない。これはもう決定事項として頭
に刻み込んでおこう。……先端恐怖症だつたりするのか、こいつは。

塩辛い。想像以上に塩辛い。

完成したナポリタンを一口食べた感想がそれだった。塩が効きすぎているのが前提で口に入れたが、それでもひどいものだった。

伏瀬は苦渋な表情でゆっくり咀嚼し相原は微妙な表情で口元を抑えている。

「……逃げていい？」

そんな反応を見た凜がふざけたことを言つ。そういうふと思つたらお前を毒見役にしたかつたんだ。

「こつちのセリフだつつの」

「いやや、だつてそんなもの食べたらわたしリアクションかますよ！？ そりやもう味皇様凌ぐ勢いで！」

「脅しになつてねえよ！」

「……やっぱ食わなきやダメ？」

「ダメに決まつてんだろ。塩はからずに入れたのお前なんだから」

「確かにそうだけど……あ、アイハラー！」

「ごめんなさい、擁護できません」

「だそうだ。私たちの分も食べろとは言わんから責任もつて食え」
ぐ、と口を噤むとさすがに観念したのかパスタを口に運ぶ。咀嚼し、嚥下。……もう完全に嫌いなものを嫌々食べる子供の顔をしてる。

「……しーおーいーぞー……」

なんぞよくわからん王様をしのぐリアクションという前評判のそれはただの感想であつた。しあいってなんだ。男同士が絡むつていアレか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202u/>

赤弓渡の伏平夏!

2011年12月1日19時49分発行